

農作物技術情報 第1号 花き

発行日 平成22年 3月24日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

りんどう 春の株管理と施肥を適期に実施しましょう
小ぎく 定植時期に合わせた計画的な育苗管理を行いましょう
施設栽培 適温管理に努めましょう

1 りんどう

(1) 生育状況

この冬は降雪も多く見られましたが、気温の高い時期や低い時期があり、気候変動の大きい年でした。萌芽・展葉等の初期の生育は地域により進み度合いの差が見られることが予想され、生育に応じて遅れないように管理を適切に行い、順調な生育を促しましょう。

(2) 圃場管理

融雪水が圃場に停滞すると、根の伸長の抑制や地温上昇の妨げになるので、速やかに排水されるよう対策を徹底します。

昨年定植した圃場では、冬期間に苗が浮き上がっている場合があります。雪解け後に早めに圃場を見回り、植え直しや土寄せなどの対策を施し株落ち被害を軽減しましょう。

マルチを除去している圃場では、畦の肩部分が崩れて根が露出することがあります。生育への影響が懸念されるので、早めに土を寄せ補修して根やクラウン部を保護しましょう。



冬期間に浮き上がった株

(3) 病害虫

残茎を前年の秋に除去していない場合は、茎に病害虫が越冬している事が考えられるので、早めに除去し圃場外へ処分します。

昨年ハダニの発生が見られたほ場では、越冬した成虫が早くから動き出し、その後の多発の原因となります。展葉期以降に芽部分を観察し、発生が多い場合は、適応した効果のあるダニ剤を散布し防除します。



残茎中のハダニ越冬成虫



展葉期の芽に発生したハダニ

(4) 施肥

初期生育確保のため、春の施肥は雪解けから萌芽期頃までに遅れないように早めに施肥します。特に早生品種は、施肥が遅れることで草丈不足など品質が低下することがありますので、早めの施肥を心がけます。なお、肥料の種類により肥効の時期に差があるので、その点も考慮します。

施肥量は窒素・リン酸・カリ各々10～12kg (10a 当たり成分量) が基準ですが、土壌診断の結果や前年度の生育を参考に、過剰とならずにバランスのとれた施肥とします。また、鶏糞や豚糞等由来の堆肥等の施用量も考慮して施用します。

肥料は芽から離し、また一箇所に大量に施用しないようにして、肥料焼けが起こらないよう注意します。

昨年定植したほ場で肥効調節型肥料「りんどう定植2年肥料」を使用した場合には、基本的には2年目の施肥は不要となります。ただし、生育の状況は随時観察して生育が思わしくない場合は原因を確認のうえ、肥料不足の場合は適宜速効性肥料の追肥を施し生育を促します。特に過湿ぎみの圃場条件では、注意して生育を観察してください。

(5) 育苗

育苗は温度管理と水管理がポイントです。適切な環境管理を心がけましょう。

特に発芽揃いまでは適温確保を心がけ、短期間で発芽揃いを目指します。その後は徒長を避けるために温度を下げるるとともに適宜換気して、締まった苗を作ります。

かん水は、乾燥や過湿を避ける管理とします。病害発生を軽減させるため、夕方には培土の内部には水分があり表面は乾いている状態になるように、かん水の時間帯やかん水量に留意します。

苗数の不足が懸念される場合は2次根発根前の早めに間引きを行い、間引いた苗や余裕のある苗を別のセルトレイに移植し、予備苗を確保します。

(6) アルタナリア菌による苗腐敗症

育苗期に発生するアルタナリア菌による苗腐敗症は、種皮に付着した病原菌が伝染源となり、子葉で発病した後、本葉に伝染します。適用殺菌剤で種子消毒に加えて、本葉2対目が出始める時期に適用散布を散布することで、以降の病勢進展を抑制します。



本葉2対目の出始め(薬剤防除時期)
子葉への苗腐敗症発生

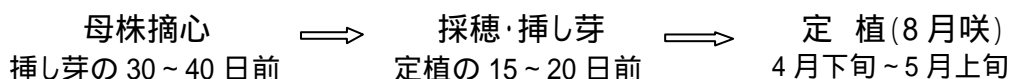
2 小ぎく

(1) 生育状況

採穂用の母株は、やや伸張の悪いところも見られますが、概ね順調に生育していますが、一部で白さび病の発生が見られます。新盆向けハウス栽培では挿し芽後の育苗が進められています。

(2) 育苗

8月咲き品種では、品種に応じた定植時期を定め、その時期に適期の苗を定植するよう計画的に作業を進めます。定植期は品種特性と各地域の気象条件を考慮して決めます。老化苗は開花期や切り花品質への影響が大きいため、作業スケジュールや管理に注意します。



挿し床の温度は地温 20℃、気温 16℃が最適で、水分は多すぎない方が早く発根します。温度・水管理を適切に行い、20日間以内の育苗期間を目指します。

9月咲き品種は5月下旬から6月上旬が定植期となります。5月上旬以降となる挿し芽時期に合わせた母株管理とし、芽の伸びすぎを避けるよう低めの温度管理とします。

また、母株ハウスでの白さび病やべと病等の発生が見られるので、換気によりハウス内の湿度を下げる事に加え、薬剤散布により予防します。

(3) 定植圃場

定植圃場は、たい肥を入れて耕起するとともに、排水対策を行い圃場作りを行います。

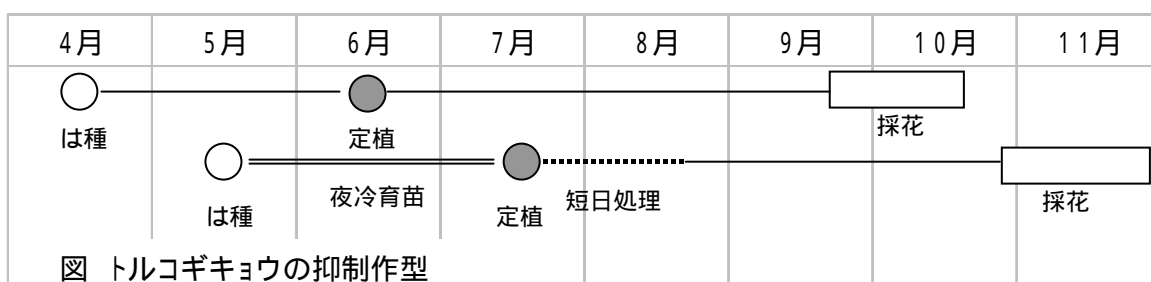
3 その他

(1) トルコギキョウ

育苗は底面給水が多く行われていますが、長期間底面給水とすると根の発育が阻害される場合があるので、本葉が出揃う頃からは上面からのかん水に切り替え、根の発育を促します。

育苗中はロゼット回避のため 25℃を超えないよう温度管理に留意します。

秋出し作型は4～5月に播種し、種子冷蔵や夜冷育苗、短日処理などにより良品生産を目指します。



(2) アルストロメリア

気温上昇、日射量増大に伴って発生するシュートの数が多くなります。適宜間引きを行い過繁茂とならないよう管理します。

施設はできるだけ換気して品質低下や灰色カビ病の発生を防ぎます。

(3) 施設管理

春先は天候による施設内の気温変動が大きくなります。品質への影響が大きいため、施設の温度管理には特に注意を払います。

次号は4月22日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。